

---

# JOKER

朱風

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

J O K E R

### 【Nコード】

N 6 7 6 6 F

### 【作者名】

朱 凧

### 【あらすじ】

《J o k e r》のカードで思い出す、「あいつ」のこと。少女の追憶。

《色占い》なるものを試してみたところ、《紫》だと出た。彩度にもよるけれど、それにしても陰鬱なイメージの色が出たものだ。とりあえず、これに決定。

紫。と、言えば。

虹の一番下のいろ。竜の胆と書くリンドウのいろ。灰色と一緒に文房具をささやかに飾ってたりするいろ。古典のいろ（雰囲気）。茄子のいろ。《神秘》のいろ。善悪の境のいろ（この辺は友人の受け売りだ）。某ライトノベル作家の文庫の背表紙のいろ。色鉛筆で白色と一緒によく余っちゃういろ（特に赤紫。使うところがない…あたしだけか？）。実は草の名前だったりするいろ。紫式部の着物のいろ（そりや偏見か）。《色鬼》をやっついて言われると妙にあたふたしてしまういろ。おばあちゃん達が何故か好んで髪を染めるいろ。

それから。

このイメージ、どうしてなんだか自分でもよく判らないけれどもあたしの中では、《道化師》のイメージがある。

紫色のつなぎに同じ色のナイトキャップみたいな帽子。白塗りの顔、けばけばしいほどの紅の口。赤い鼻に頬の涙や星のメイク。つま先の反り返った黒い靴。金か茶のちりちりの髪で。そんな道化師のイメージ。

他は。

そこであたしは手を止め、紫色を求めて自室を見渡した。机の引き出しを開けてみたり、本棚を覗いてみたりする。本当に紫色つて無い。なんであたし、そんな微妙な色の判定になったんだ。

いや、あるにはあるけど、表現するのが難しいような、やはり微妙なところにばっかある。例えば、MDウォークマン付属品の……

布ケース（？ アレなんて言うんだ）とか、窓際のポプリ（一般的じゃなさ過ぎる……）とか。

何故あたしがこんな無駄にしか思えないような探索をしなければならぬのか？ それは、学校（国語科）の宿題だからだ。《好きな色》についての作文を書いて来い、とのありがたくうつとうしい課題。……あの教師め、これで受験に出なかつたら卒業式、暴れてやるから覚悟してろよ……。

あたしは盛大な溜め息をひとつ吐いて、ついでに、と本棚の隣の縦に細長いプラスチック製の半透明な収納ケースを開けてみた。適当にあさる。

上から三番目のケースを引き出して、あたしはふと目についたものを取り上げた。

たった一枚の、トランプのカード。図柄は、奇妙にわらう、紫色のつなぎを着た道化師。

これが。

さっきの変なイメージの正体は。

そう判明して、あたしは我知らず自嘲めいた苦笑を漏らしてカードを手にしたままベッドに倒れ込んだ。やる気なんか失せていた……

……いや、最初からそんなもの、無い。

何故忘れたんだろう、このカードのことを。……あいつのことを？ あいつは元気でやってるに違いない。どこに行ったのかは知らない。

あたしは変わった。そして、変わっていないから。

また会ったとき、あいつは何か言うだろうか。それ以前にあいつ、あたしのこと、判るだろうか？

『どうでもいいから、早く終わってくれないかな。』

『次に、転校生の紹介を』

少女の望みをまるで無視した、スピーカーから流れる拡大された

校長の台詞に、少女はがつくりと肩を落とす。九月上旬。残暑は厳しい。教室に入ったところでさして涼しくなどないが、直射日光は避けられるから、今すぐにだって逃げ込みたいのに。校長の長袖のスーツも、見ているだけで不愉快だ。ああ、もう教室にだって行きたくなくなってきた。早く、帰りたい。

それにしても誰より哀れなのは、こんなときに編入なんてしてきてしまった転校生だ。まさか転校生を朝礼台に上げて全校生徒に、しかも校長直々に紹介されるなんて思ってもみなかっただろう。二回転校を経験している少女も、この中学校で初めてこんな制度を採っている学校もあるんだということを知ったくらいだ。

結局少女は始業の式を始終うつむいたまま、全ての言葉を右耳から入れて左耳から流し、その場をやり過ごすことに成功した。

やつとのこととで教室に入り、少女は席に着いて下敷きで顔を扇いだ。教室の天井で回るふたつきりの扇風機など、役にも立たない。少女には空気が掻き混ぜられ、埃が舞うだけに思えて仕方がない。

……前の学校じゃエアコンがあったのに。

二年生の後半に編入してきたこの三度目の学校にも、生徒にも、教師にも、少女には何の愛着もない。《親友》なんて作れるはずもなく、作るつもりもなく、気付けば三年の二学期だ。さしてよくも知らない高校の選択を迫られ、とりあえず少女は自分の学力に見合った公立校を選んだ。

ところで、少女には《親友》はいなかったけれど、《腐れ縁》の少年が居た。この中学校に来てから何か事ある毎に同じクラス、班になってしまう男子。これを《腐れ縁》と呼ばずして何と呼ぼう。ショートホームルームが終り、クラスの面々がばらばら帰る中、その姿が少女に近付き、「おはよ」遅過ぎる挨拶をした。

「……宿題なら持ってきてないよ。おはよう」

新学期になるといつも言われる台詞を予測して少女が先に宣しておく、少年はにやつと意味深な笑みを浮かべた。

「今回は、へいき」

予想が外れて目を丸くする少女に、少年は笑ったまま何の説明も施さず、入り口にかたまる友人達の方へと歩き去った。つくづく、同じところにいるのが苦手な奴だと少女は思った。少年を探して教師が右往左往しているところはよく目撃されているし、転校も本人曰く「数え切れないほど」（きつと冗談だ）。

そして少女と少年の《腐れ縁》は、志望校までもが同じだった為、高校までも続くはず、だった。

初めに、どうして目をつけられてしまったのか、少女は今でも理解に苦しむ。

「いつも読んでるよね」

二年で転校してきた少女に、少年は最初そう声を掛けてきた。転校生として散々突っつかれたのも束の間、天然的な無愛想を貫いていたら放っておかれるようになって、安心して少女が本を読んでいた昼休みのこと。

視線だけ動かしてほとんど睨むように相手を見た少女に、少年は読書を邪魔してもなお全く悪びれる様子もなく、「あ、もちろん違う本なのは判るけどさ」などとのたもった。

「なに」

不機嫌も露に少女が問うと、少年はにこにこ笑ったまま「何も。単なる感想」などと言う。

単なる感想を述べられても、少女としてはリアクションの取りようがない。もともと感情表現は苦手な方だった。困惑して押し黙る少女に、少年は何か銜うように、

「ダウトのジョーカーみたいだ」

と、意味不明なことを言つてのけた。

ダウト。《疑い》の意味を持つトランプ遊戲の一種。一からひとつずつ数の大きい数字を宣しながらカードを場に置いていく。そのときに自分の番に回ってきた数字とは違うカードを、それと偽って場に置いてもいい。周囲の人間はその場に置かれたカードが怪しい

と思ったら「ダウト」とコールしてめくらせる。それが言った数字と一致していたらコールした方、偽物なら置いた方に場のカード全てが雪崩れ込む。下手なひとなら終れないことにもなり得る、言わば騙し合いのゲームだ。

「どうして……ダウトのジョーカー」

ジョーカーは最強のカードで、いつ出してコールされても負けることはないのだが、最後まで隠し持つことは禁じ手とされている。もちろん、最後に出しても「ダウト」をコールされなければバれることはないが。

「強いからさ。有無を言わせないカードだよ。あ、ちなみに俺もジョーカーね」

「……強いんだ」

さらっと付け加えられた一言に、半ば呆れながら少女が相槌を打ってやると、無い無い、と少年は顔の前で手を振った。

「俺は、ジョーカーはジョーカーでも、ババ抜きのジョーカーだよ。ずっとと同じところに居られない、嫌われ者のジョーカー」

ババ抜き。は、敢えて説明する必要は無いだろう。ババ抜きを知らないひととばかり、トランプさえも知らないであろうから。

少年のかなり卑屈な台詞に、少女は首を傾げた。少女には、その少年は確かに落ち着きなくうろついているイメージはあったが、嫌われている感じはしない。むしろ、嫌われているとするならば。

「あたし、の方が、ババ抜きそっちののジョーカーに近いよ」

よく判らなかったが、どうもこのクラスの面々には話が合う云々よりも、彼らなりの《面白さ》にかなりのウエイトを置いている節がある、と少女は分析していた。そして、自分にはその《面白さ》が備わっていないことも、理解している。

少女の言葉に少年はきょとんとして、瞬きした。

その様子に少女は己の返答のミスに気付いた。このひとも、《面白さ》を求めていたのか。なら、真面目に返すところでは、きつとなかった。

だから人付き合いは苦手なんだ、煩わしい、と少女が心の奥で深く溜め息を吐いたとき、目の前の少年はパッと顔を輝かせた。

「じゃあ、ジジ抜きが出来るなっ」

「……へ？」

少女が普段学校で見たことのない間抜けな表情で、普段学校で聞かせたことのない間抜けな声を出したときには、やはり少年はその場から軽い足取りで去っていた。

ジジ抜き。ババ抜きを擦ったもので、ジョーカーではなく、伏せたトランプの山から裏返しにしたまま一枚抜き出し、それからゲームをスタートする。いわゆる《ババ》が何か判らない状態だ。最後に誰かの手元に残った一枚の対が、やっと《ジジ》だと判明し、もちろんそれを持っていたひとが負けになる。

そしてこのゲームでは、ジョーカーも普通のカードとして同じように参加出来る。普通四枚ある数字よりは合う確率は当然低くなるが、可能性は○<sup>ゼロ</sup>ではない。ばらばらになっていても、いつかは必ず二枚揃う。

このときから、ゲームの通りに必ずふたりのジョーカーは揃うようになってしまった。

なのに。

二学期が始まって、三日してから突然告げられた少年の台詞に、少女は自分の耳を疑いながら身を硬くした。

「俺、また転校するから」

さして頓着した様子もなく、少年は笑う。誰も通らない廊下の端の、客と身体的ハンディを負ったひとと、後は校長しか使ってはいけないエレベーターの前。

「転校って……、だってもう、三年も終りなのに……」

「うん、あと少しな。けどもう決まっちゃったし。だからこれ、饞別」

そう言って少年は一枚のカードを少女に手渡した。見てみるとそ



れはトランプのカードだった。図柄は紫のつなぎの道化師。書かれた文字は《Joker》。

「言っても、今度会ったら返してくれよな。それ無いと、ジジ抜き出来なくて困るんだ」

尊大な態度で言い放つと、少年は「じゃ」と少女に有無を言わず退散した。少年の言葉を借りるなら、まさしく《ダウトのジョーカー》だ。

ジョーカーなんてなくても、ジジ抜きは出来るだろうに。手にした一枚のカードを見つめて、なんとなく少女は笑うことが出来なかった。

あいつ。あの道化師。

あたしはちつともダウトのジョーカーなんかじゃ、強くなんか、決して、決してなかったのに、知った顔しやがって。

また会ったとき、あいつは何か言うだろうか。それ以前にあいつ、あたしのこと、判るだろうか。

判らなかつたら、このカードを叩き付けて思い出させてやる。

あたしはダウトのジョーカーなんだそうだから。

あいつに会えないかもしれない、なんてことは考えたこともない。何故か、なんてのは愚問だ。判り切っている。

なんと言ってもあたしはダウトのジョーカーであると同時に、ジジ抜きのジョーカーだ。

そして、あいつも。だから、《<sup>ダウトの</sup>疑う》余地はない。ジジ抜きのジョーカーは必ず二枚揃う。そういう設定に、なっている。

なによりあたしの手元には、あいつに渡された《Joker》のカードがある。

《Joker》の持つ意味は、《最後の切り札》。

それを持っているダウトのジョーカーのあたしは、だから最強。だから、あたしは疑わない。

少女はゆっくりと、まどろんだ。

少女の手の中で、《道化師》が鮮やかにわらう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6766f/>

---

JOKER

2010年10月8日15時53分発行